

## コード作りはイエローカード

先端基礎研究センター長 伊達 宗行

原研における基礎研究推進の中核として先端基礎研究センターが発足して以来1年が過ぎた。大学の理学部長から当センター長へと管理業務を切替えた経験からの感想はいくつかあるが、研究に対する考え方で、あと思ったことの一つが表題のコード作り、である。研究計画書をみると、……を行った後にこれらを総合してコードを作る、というのがよく出てくる。ここで言うコードとは、例えばある種類の放射線が物質に入った時、さまざまなプロセスを経て消滅、あるいは通過する際に、その起こり得るプロセスのトータルをモデル化、定量化して放射線影響を評価できる実用的仕様書、とも言うべきものを指す。このようなものは原子炉の設計は勿論、放射線防護の立場から見ても不可欠で重要な資料である。基礎研究における理論計算、あるいは実験データ集積用ソフトの事ではない。

当センターの諸計画は筆者の着任前に既にかなり決められていた。これは数年前に始まる原研全体のリストラの流れの中で、これまでともすると欠けていた、あるいは低滞していた基礎研究を強力に推進しよう、という強い決意の下に浮上していた諸テーマで構成されており、いずれも仲々良い計画であると感心したものである。筆者がつべこべ言わずとも既に原研は優れた問題意識と、その選択能力を有しているのではないか、と思った。ところがこのコード作りに目が及んで原研の研究者にはこれが陰に陽にかなりの心理的背景をなしていることに気づいた。

コード作りとは、新しい原理、現象が発見され、その周辺現象が解明された時点で浮上する、という位置付けの1つの作業、と見られる。そこにおける目的意識は、原理、原則の発見からは遠い。むしろそれが終わってからの目的研究に対する基礎整理の一つ、と位

置付けられよう。当センターの目標は、新原理、新現象、新物質の発見にある。俗に言えば、ノーベル賞を狙う研究をする所であって、コード作りでノーベル賞はもらえない。

原研における基礎研究の衰退はつぎのようにして起こった、と考えられる。ある時期において実用的研究重視が主導的となった。その中で基礎研究者は、「その研究はどんな役に立つのですか」と問い続けられて来たようである。そこで彼等がみ出した智慧の一つが“コード作り”だったようである。いわく、「このような基礎的データを集積すると新しい物質評価データベースになり、実用コード作成に有為である。」しかしそれはいわば言い逃れであって、本当にやりたいことはコードに至るかどうかわからない基礎的研究であったであろうし、また各自の仕事が、現場からのコード要求があつて始めたわけではなく、希望的期待を持っただけの自閉的な世界に止まりつづけて来たように思われる。

このような心理的圧迫感があつては自由で独創的な基礎研究は決して成功しない。そしてその惰性としてのコード作りへの逃避はやめるべきである。従つて筆者は、むしろスローガンとして表題のように「コード作りはイエローカード」と言いたい。コードを作りたい、と研究者が行つて来たら、これは認めるつもりである。しかし基礎研究として同時にイエローカードを1枚渡す。そしてそれが3枚になったら、その研究は打切り、ということもある。場合によつたらサドンデス、である。そのくらいの思想転換をはかる決意があつてはじめて原研の基礎研究は健全に前進するもの、と考えている。